

2000年11月9日(木)午後6時半－8時半、東京国際フォーラムのガラス棟402号室にて、SGRA第一回研究会「地球市民の皆さんへ」が開催されました。約50名の参加者は、SGRAの目標である「良き地球市民の実現」の「地球市民」とは何かということを考えました。

「グローバル化と地球市民」研究チームの薬会チーフの研究経過報告の後、一橋大学で地球市民論の講座を担当されている関啓子教授より「地球市民の皆さんへ」というタイトルの講演をしていただきました。

関先生は、地球市民という概念は、成績表がつけられるようにはっきり規定されるべきものではないこと、地球市民は知識を蓄えるだけでなく行動することが大切なこと、マジョリティもマイノリティも対話をしながらお互いにならっていくプロセスが大切な要素であることなどを強調されました。

次に、ニューヨーク大学客員教授のローレンツ・ビヒラーさんの「市民社会？西洋の論理と中国の現実」というタイトルの発表では、ヨーロッパ人の意見として、中国の天安門事件においては、東ヨーロッパのキリスト教会や労働組合のような頼るべき市民社会がなく、対話を求めた学生は共産党を脅かすものとして弾圧されたこと、しかしながら近年「宣伝通訊」「内部参関」のような党内部の機関紙さえオープンになりつつあり、より多くの人々を巻き込む国家主導型市民社会が発達しつつあることが報告されました。

三番目の発表者、東京大学博士課程の高熙卓さんの「近代以前の日本と＜公共＞性」の発表では、江戸時代の民間儒学者の伊藤仁斎の「天下の公共」思想では、為政者中心の「公・私」「天下」「王道」思想から一般人中心のものへの捉え直しが行われていることが指摘され、西洋理論が導入された明治時代以前の日本を対象に＜公共性＞を語れる可能性は大いにあるとの結論がだされました。

その後、限られた時間でしたが、3名の発表者に対して質疑応答が行われました。参加者には2種のアンケートをお願いし、「地球市民の意識調査」の集計結果は研究会の最後に写真と一緒に披露されました。

(文責今西)

S G R A「関口グローバル研究会」第1回研究会

「地球市民のみなさんへ」

日 時：2000年11月9日（木）午後6時半より8時半まで

場 所：東京フォーラム ガラス棟G402会議室

プログラム

挨拶・・・S G R A代表 今西淳子

S G R A「地球市民」研究経過報告・・・薬 会（法政大学国際文化学部講師）

ゲスト講演「地球市民のみなさんへ」・・・関 啓子（一橋大学大学院社会学研究科教授）

研究報告「市民社会？ 西洋の論理と中国の現実」・・・Lorenz Bichler（ニューヨーク大学客員教授）

研究報告「近代以前の日本と＜公共＞性」・・・高 熙卓（東京大学総合文化研究科博士課程）

質疑応答

アンケート「地球市民の意識調査」

アンケート「研究会に対するフィードバック」

司会：S G R A運営委員長 嶋津忠廣

「グローバル化及び地球市民の概念と認識度の国際比較調査」

研究チームメンバー

顧 問 関 啓子

チーフ 薬 会

今西淳子

高 玲娜

高 熙卓

マイリーサ

李 松涛



SGRA

開会のごあいさつ

代表 今西淳子

皆さん今晚は、SGRA 代表の今西です。やっと第一回の研究会が東京国際フォーラムで開けるようになって、大変嬉しく思っております。このSGRA 自体が「良き地球市民の実現」ということを目標に掲げておりまして、それに向かって色々な活動を進めていこうと思っています。



ただ、その間に、では「地球市民とはなんだろう」ということが常にみんなの議題になっておりまして、今日の最初の研究会は地球市民を取り上げました。まず一橋大学で「地球市民論」の講座を持っていらっしゃる関先生に「地球市民」と言うことについてお話しいただきたいと思います。このあと研究チームのチーフの薬会さんからも報告していただきますけれども、夏前から何回か「地球市民って何だろう」ということを考えている内に、どうも一つは、「グローバル」ということが国家との関係で問題になるのではないかということと、それから「市民」というのがヨーロッパから来ている西洋の概念だからアジアと違うかも知れないということが段々深まってまいりまして、それでは先ずヨーロッパの方に「市民」について話していただこうと思い、今日はローレンツさんに、市民、特に中国のケースで話していただくことになりました。ローレンツさんは昨日ニューヨークから着いて、来週上海にいらっしゃるの

ですが、その途中、東京に寄って下さって、絶対日本語でやってくださいという、無理なお願いをいたしまして、今日発表していただくことになりました。それから、地球市民ということが西洋から来たものなのか、それではアジアの地球市民というのは何なんだろうということを考えていたときに、西洋の影響を受ける前の日本にも公共的な思想があったということの研究なさっている方がSGRA 研究員におられまして、東京大学で博士論文を書いていたらしいその高熙卓さんに「江戸時代の公共性」についてお話しいただくことになりました。

SGRA の研究員の皆さんにいつもお願いしているのは、とにかく易しく、誰にでもわかるように、それも短い時間で説明してほしいということです。これは、SGRA の課題ですが、発表者にとっては大変に難しいことであることを、ご理解いただけると嬉しいと思います。

それから、研究会といっても学会とはまた違って、なるべく皆様が参加していただけるような仕組みを作りたいと思っております。今日、2枚もアンケートをお願いして申し訳ないと思いますが、黄色い方は途中で回収させていただき、青い方は最後に回収させていただきたいと思います。皆様に参加していただける研究会を作りたいと思ひまして、まず今日やってみまして、これからもどんどん工夫していきたいと思いますので、どうぞ宜しくお願いいたします。

SGRA「地球市民」研究経過報告

薬 会

法政大学国際文化学部講師

「地球市民研究チーム」の紹介を簡単にさせていただきます。

「地球市民研究チーム」の活動は、SGRA研究会の発案とほぼ同時にスタートしました。私たち渥美財団の奨学生たちは、世界各地から渥美財団の所在地である東京都文京区関口に集まってきて、そこからまた世界の、地球のどこかへ飛び立っていくという集団ですが、ここから世界に発信できないかというような話が、同窓会有志の間でありまして、去年の12月の集まりで、ついにSGRA設立についての動議案が出されて、「地球市民の実現」への第一声が発せられたわけです。そして今年2月、SGRA準備委員会第一回の会議で、地球市民研究チームの結成が確認され、スタートしました。

「地球市民研究チーム」の構成研究員は現在6名ですが、研究テーマは、「グローバル化および地球市民の概念と認識度の国際的比較研究調査」です。研究の目的、概要は、世界各国における「グローバル化(Globalization)」および「地球市民(Global Citizen)」という言葉の成立過程と概念の差異を明確に把握し、人々の認識度を国際比較研究しています。次に、各国におけるアンケート調査により、地域や文化の差が「グローバル化」および「地球市民」の認識度の違いに影響することを確認したいと思います。また、その差が、情報量、とくに、衛星放送やインターネットの普及度や、民族の多様さ、移民の多さなどの要素と、どのような関連があるかを探り、「グローバル化」及び「地球市民」意識の普及のためには、どのような配慮と戦略が必要かを提案したいと思っています。

これまでの研究経過として、今年の5月に、台湾の輔仁大学と日本の学習院女子大学、そし

て中国の上海大学で、地球市民に関する予備調査を実施し、貴重なデータを得ることができ、この結果を7月に報告いたしました。一方、「地球市民」の調査研究が広く深まるにつれて、私たちはますます力不足を感じ、一橋大学の関先生に顧問役をお願いしましたところ、快く引き受けて下さいました。そして、地球市民の関係資料も提供して下さいました。

その後、この研究チームでは、7月の軽井沢セミナーで、地球市民に関して集中的に議論・討議しました。本日の黄色いアンケート用紙の中にもそういう討議の内容も含まれていますが、特に定義のところは、軽井沢セミナーで達成された私たちの認識です。そして今年10月、地球市民をテーマとするSGRAの月例会を行い、軽井沢のセミナーで得た皆さんの認識について再確認を行いました。

私たちの「地球市民研究チーム」は、以上の研究経過を経た上で、本日のSGRAの第一回目の研究会を迎えることになったわけですが、今までの研究では、地球市民の研究に関して、完璧に共通した認識を得たわけではなく、本格的研究はまだこれからです。しかし、一つだけ断定できるのは、私たちSGRA会員は、誰もが地球市民になりたいという気持ちを持っていること、良き地球市民の実現という共通目標を目指しているということです。

本日このような研究会が開催されまして、関先生のご講演、高さん、ローレンツさんのご研究が、私たちの地球市民になりたいという気持ちに、自信をつけてくれるものと信じております。これから、いよいよ山場である調査を始めますが、ご協力・ご支援をお願いいたします。

「地球市民のみなさんへ」

関 啓子

一橋大学大学院社会学研究科教



今日はまず地球市民の話に入る前に、財団の皆様にお礼を申し上げたいと思います。今日一緒に来ております大学院の私のゼミに所属していた院生ですが、彼女は、渥美財団からご援助いただき、学位請求論文の作成に励んだ結果、無事に昨日の研究会委員会で、学位授与が内定されました。財団の皆様や励まして下さいましたお仲間の皆様に心から感謝しております。ありがとうございました。

私は、地球社会研究専攻と、それから既存の社会科学の専攻と両方に所属していますが、地球社会専攻では全体の方向性としてディシプリンにこだわらないで行こうということになっています。グローバル・イシューの中で、人間の形成にかかわるようなところ、人間の教育にかかわるようなところを地球市民論という科目で担当しています。

地球社会研究専攻の教育方針の一つが、先ほど今西さんのお話にありましたように、「分かりやすく、短時間で言いたいことをきちっと言うこと、プレゼンテーションのできる人になろう」という課題です。ところが、私たちの世代は、そういうトレーニングを受けてこなかったのが、院生や学生に対して、「プレゼンテーションの技術が大切だね」と言ってお

きながら、自分自身は余りうまくない。ですから、こういうところでお話しするのは、私にとってもとてもよいトレーニングのチャンスでありますので、今日は評価される立場で、30分ぐらいで言いたいことを言えるように努めてみるつもりです。

「地球市民とは何か」ということが、いつも皆さんの課題になっていたということは聞きましたし、それから薬さんのお話も聞きました。薬さんたちのご研究の成果についてお纏めになったペーパーの一部も読ませていただきました。地球市民を考える上でのキー・タームは、ほぼその中に入っておりまして、私がここで強いて「地球市民とは」という概念化をすることもないような感じがいたします。同時に、概念化は余りしたくないという気持ちもあります。

それはなぜかといいますと、私の学問的な基礎を形成しているものの一つに教育学がありますが、良い悪いは別として、教育学は、ある基準で人々を評価し秩序化し序列化するという仕事をしてきています。ですから「地球市民とは何ですか」「はい、地球市民とはこういう人ですよ」というと、「ああそうですか、それならばAさん地球市民度5、関さん地球市民度2、もう一回学習をやり直して下さい」というようなことがすぐ言われてしまうようになりかねない。でも「地球市民」というのは、そのような、人を仕訳したり、秩序化したり、順序立てたり、進歩した人と遅れた人とを区別する概念としてあるのではない。むしろ、人間の秩序化や序列化をしない、それを避ける、共生とか協調とか協力とか共存といったことを促すタームとして使われていると思います。ですから、むしろ薬さんのお纏めになった

ペーパーの中にあるような、幾つかの重要なタームについて抑えが効いていれば、地球市民は、地球市民度、度数で計られない方がいいのではないかと考えておりまして、むしろそういった度数につながるような概念化は避けたいと思っています。

今まで私を含めて何人かの研究者や院生と、「地球市民」というタームはどういう使われ方をしているかを調査したことがあります。精密な調査ではないですけども、どうも地球市民のイメージというのがあるらしいということがわかりました。

そのイメージというのは幾つかあるのですが、最も短くしてしまうと、まず、「国境を越えて活躍する人らしい」。それから「現代科学の最先端を行っている人らしい」。それから「正義とか公正とかいうことを実現することを努めている人のようだ」。したがって、実に宣伝などの文句に使われやすい言葉なのです。「地球市民って、悪い人の集まりだ」と思う人はいなくて、「遅れた人の集まりだ」と思う人もなくて、現代的な知識・科学を持っていて、そして差別とか余りしないで、みんなと仲良くやっていく、なにかいいイメージじゃないかなという、そういうイメージが先行してしまっていると思います。

その中で具体的な像を描こうとすると、恐らく多くの人が指摘するのが、例えば開発にかかわるNGOで活躍している人とか、さまざまな環境保護・生態系回復にかかわる活躍をしている人たちとか、そういう人たちが目に浮かぶようです。そういう人たち、地球上のさまざまな動植物と人間の調和を保とうとして活躍する人々が真っ先に頭の中に浮かんでくるようです。

さて、良い・悪いは別にして、地球市民が出てくる背景があったと思います。先ほどのお話にもありましたように、それがグローバリゼーションです。経済や政治の大きな世界的な流れの中で、地球市民ということを行わざるを得ない、あるいは、言いたいということが出てきたのではないかと思います。私は経済のグローバリゼーションの専門家ではありません。それから先ほど国家とかかわりという重要な指摘がありましたが、正にそのとおりだと思いますが、その部分についての専門家でもありませんので、自分としては「地球市民」と言うものを、「人間形成」という観点から見たら何が言えるだろうか

ということに絞りたいと思います。強いて「教育」という言葉を使わないで「人間形成」と言いましたのは、意図的な教育も含まれますが、無意図的な作用も含めて人間形成の観点から見てみたいと思っていますからです。

もうちょっと平たく言ってしまえば、「子育て」とか、「独り立ち」、「一人前」になる過程に注目したいわけです。もう少し言葉を代えれば「自立」です。私は「自立」と言ってしまうのが一番いいかもしれないと思います。

ところが、自立と言って批判をされたことがあります。なぜかというと、「自立」という言葉はヨーロッパ近代から生まれた概念だから、関が「自立」と言うとするれば、あなたの考え方はもうヨーロッパの価値基準に支配されていることを示すことになると言われました。なるほど、納得のいく意見でもあるから、次に何をを使うかと考え、「一人前」という言葉を使おうと思ったんです。そうしたらまた批判がありました。「一人前」という言葉は柳田国男が使っているので、今度は日本中心じゃないかと言われました。こっちを言うとヨーロッパ・欧米、こっちを使うとニッポン中心、参ったなあ、どう言ったらいいんだろう。自民族中心主義者になるのはまずいなあと悩みました。

ところが「子育て」とか、「独り立ち」を使うと、余り異議がないようです。だからよく「独り立ち」という言葉を使いますが、けれどもヨーロッパ近代が使った「自立」でも良いと思いますし、それから「一人前」になるというのでも良いと思いますし、そんなにこだわる必要はないのかも知れません。

しかし、そんなにこだわる人たちがいるくらい、今いろんな文化圏の人たちが、対等に発言しようとしている事態はとっても大切なことで、これこそ正に地球市民を育む土壌だと思います。ですから、そこを大切にしようと思います。「独り立ち」あたりが良いのではないかと考えています。

さて、「地球市民」と聞くと、ここにいらっしゃる方はほとんどそうだろうと思いますが、少なくとも私たちは二つ以上の文化を理解して、二つ以上の言語も理解して、そして国境を越えて「発展」とか「開発」とかに貢献する人々をイメージするだろうと思います。今、「国境を越えて開発」と言いましたけれども、「開発」と言った途端に皆さんの中で

ピピッとアンテナが動いて、「それはまずいんじゃないか」というのが聞こえてきますので、コメントを付けさせていただきます。生態系の回復なども含む開発とを考えていただいて、人々の発達に貢献するというイメージ、もう一つ言葉を加えれば、地球規模の課題の解決に力を合わせていく人たちということだろうと思います。

地球規模の課題というと、例えば原発をめぐるさまざまな問題とか、いろいろな環境問題が、私たちの頭にすぐ浮かぶと思いますが、それは国境の中だけで解決が出来ません。被害や問題も国境の中だけに納まらない。だから被害の方も地球規模、解決も地球規模。環境問題は、国境に合わせて、私はこうだ、あなたはこうだと言い合って、人のせいにし合っているけど解決できない問題です。正に、不幸にも私たちが持ってしまった地球規模の問題を解決するために力を合わせなければなりません。それが多分「地球市民」という言葉を創り出してきた土台にあるのだと思います。

だから、課題解決のために努力する。課題解決のために国境を越えて連帯して活動する。これが人間形成の上ですごく大きな課題であり、重要な傾向だと思っています。

もう一言それに加えると、地球市民というときに、知識をいっぱい詰め込み高学歴だが、社会活動や市民運動などを何もしない人を指してはいないと思います。地球市民といっているときには多分、今までのイメージに含まれているように、何か動く人、活動する人を指していると思います。

今までは、私たちの知識というのは、識字活動家で社会教育の研究者として有名なフレイレという人の言葉を借りれば、銀行預金みたいなもので、残高証明というのがあって、私たちは知識知識といってそれを貯め込めば、よい仕事を得られると思ってきました。何をしたかということではなくて、残高証明が高かったというだけで、人が一定のポストを得たりしてきた訳です。しかしながら、「地球市民」と言っているときの知識というのは、そういうのではダメです。「地球市民」には、手も足も頭も全身体を使って、課題の解決に努力する人という意味が含まれているような気がします。

これは人間形成とか教育、とりわけ教育という観点から言えば、えらいことです。今まで行動も含めて人を育てるということをしてこなかったから、こ

れは大変なことなのです。新しい課題、地球規模の課題というのが出てきてしまって、その解決のために国境を越えて人々が繋がっていく、そして解決を模索するというのはすごいことです。つまり、もう一つの新しい傾向とは、知識を貯め込んでいるだけではなくて、それを何かの活動に繋げようとしている人々が増えていることです。この面で突出した人は今までにもいたと思いますが、地球規模でそれが話題になってきたことは、正に大きな意味のある傾向だと思っています。

そういったことを踏まえて、少し無理してモデル化すると、二つぐらいのモデルがあると思います。

一つはグローバリゼーションのもとで外国語を幾つも修得して、幾つも文化を理解して、国境を越えて自国と他国の経済発展と開発のために尽力する人々で、大半が高学歴者で、豊かな近代科学に裏付けられた知の体系を持っていて、欧米中心の生活スタイルを人類の到達点だと思っている人たちです。その到達点をシェアできない人たちにできる限り分かち与えようと努力する人々です。そしてその人たちが作った言葉が発展途上だと思いますが、途上にある人たちに、できるだけ自分たちの持っている到達点に近づくように促すわけです。ここでは、開発や発展を数値で表現することができるだろうと思います。そういうモデルもあると思います。

もう一つはそうではなくて、自らの文化や言語を持っているが、それは主流文化や主流言語ではない。だから幾つもの言語を習得せざるを得ない。そして自分たちの生活スタイルは欧米中心の生活スタイルではなく、欧米基準で言えば遅れているスタイルかも知れない。しかし自分たちは自分たち独特の生活スタイルと価値観と自然観を持っている。そういった人たちもまた私は地球市民だと思っています。

この人たちは一般的にマイノリティと言われると思いますがけれども、そのマイノリティはマジョリティとの関わり合いの中で、人間関係の新しいあり方を作っていく人たちですから、正にその部分を見ると、そういった人たちの中にも地球市民のモデルがあると思います。

そういうふうにと考えると、どちらが良いとか悪いとかいう問題ではなくて、両方ともどのような過程を経ると地球市民的になるのだろうかというこ

とを考えてみたいと思います。

恐らく一番重要なところは、「異なる」ところを持っている人たちとうまくやっていけるかどうかということです。マジョリティになっている人たちとマイノリティになっている人たちが、一緒になってうまく生活課題を解決できるかということだとも思います。

重要な点の一つは恐らく言語だと思うのです。今ここにいらっしゃる方々のほとんどが、複数の言語を持っていられる。国境を越えて、学問のために、あるいは経済活動のために、あるいはその他の目的のために動く人たちというのは、どうしても言語を複数マスターすると思います。同時に文化も複数理解していると思います。これはとても大きなことだと思います。こういう人たちは、私の調査している地域でいうと、大抵はマイノリティの方に多い。

私は長い間旧ソ連圏を調査対象にしてきていますが、ロシア人はロシア語しか話せない。第一に習得する外国語は英語です。英語が大変上手な人は多いようです。例えば、ロシア人はグルジアに住んでいてもグルジア語をマスターしない。ところが、支配の立場にないエスニック・マイノリティの場合は複数の言語をマスターしているという場合が多いんです。

ありのままでいて、自分の好きな生き方をして、自分の目的を早々と達成する人をマジョリティだとすれば、何か努力をしないと、何か忍耐しないと、目的を達成できない人がマイノリティだとも言えると思います。そういう意味で言いますと、むしろマイノリティの方に、即ち移民だとか難民だとか、あるいは少数民族とか、少数派に入ってしまう人たち、そういう人たちは多文化を受容し、言語習得の幅も広いようです。

それからもう一つは、課題解決型思考様式ができるかどうかだと思います。この課題解決型思考様式を身に付けられれば、さまざまな文化を持っている人々とうまく折り合いをつけて、一つの共有している課題を、それぞれの文化を活かしながら解決することができる訳です。そういう思考様式を形成できるかどうか重要です。そういう思考様式を学校と学校外の両方で育てることが重要な課題だと思います。

しかし、学校だけに過大な期待を寄せるのは無理な話だと思います。なぜなら学校というのは、支配

的な文化を伝達するのが主な任務である訳ですから。多文化社会の中では多文化を教えるはしませんが、学校の基本は支配的な文化を教えることです。現在の課題は総合的な学習能力を付けさせることができるかどうかだと思います。

そのためには、教科と教科の壁を低くすることができるか、そういうカリキュラムを組むことができるか、それから教師と生徒の関係が、教える人・教えられる人の縦系だけの関係だけではなくて、横の関係も含んだようなものを作ることができるかどうか、学校外ならば指導者及び組織者と仲間たちの関係の中にそれができるかどうか重要なポイントです。

誰かが一人で決めてしまうというのではなくて、ある民族が優位に立ってみんなのことを決めてしまうのではなくて、男性が中心になって全部決めてしまうというのではなくて、さまざまな異なるものを持つ人々が一緒に知恵を出し合って解決していくことが大切です。こういうことが出来る思考様式と行動様式を身に付けることができるかどうかにかかっていると思います。

もう一つの要素としては、「育ちの場」と言います。自身が育っていく場ということが重要になってきて、そこでは「参加」と「対話」というのがポイントだと思います。

しかし、よくある参加というのはですね、参加するけれども、もう結論も決まっているし、理念も決まっているし、ある程度支配的なものが決まっています。そこに参加して「賛成」と言うだけです。

よく調査に行っているのですが、例えば、学校の運営に関して親たちがいろんな意見を言う。ところが親たちの中で、その場をリードできるような人が必ずいて、それで会議は動いてしまう。例えば、学歴が高くて、教科書的な用語を上手に使いこなすことができ、弁舌さわやかな人が発言すると、反論しにくい訳です。お母さんたちが、「あの、そうじゃないんだけど。うちの子供の場合はちょっと違っているな」と思っても、かっこいい言葉を思いつかない。「ああ、言いたい、言いたい・・・だけと言えない」といううちに終わってしまって、「皆さん賛成ですね」と言われると、なんとなく賛成になってしまう。そこで反対と言えなくて終わってしまう。武器になる言葉を持っていて、使う技術を知っている人に押されてしまう。普通は、鋭くて切れること

と言える人が勝ちなのです。

鋭い言葉と言える人というのは、一定の学歴を持っていてトレーニングをされていて、そして、ある生活様式、生活スタイルを持っている人です。それを持っていない人はダメというような参加はやめにして、誰でも恥ずかしくない、どんな文化、どんな学歴、どんな言語を持っていても、自由に話せるような、そういう「参加」「対話」がまさしく必要です。

例えば、Aさんが言ったことは素晴らしいというので反論できないのではなくて、AさんとBさんが違った意見があるのならば、CさんもDさんもみんな参加して意見を交わすことによって、その結果Aさんの意見もちょっと変わって、Bさんの意見もちょっと変わって、ということがある世界。そういう「対話」が欲しいと思います。

私は、「平等の関係」という、教育学が使う美しい言葉をほとんど信じていません。それを信ずることによってマイノリティが苦労してきたことを、私の調査はいやというほど拾い上げてしまったので、カッコいい言葉は使いません。

平等というのは単にゲームのルールが同じだというだけです。同じスタート地点に並ぶというそれだけの話です。もちろん機会均等は疑いなく重要なのですが、「対話」というのは、口先の平等ではなく、AさんもBさんも共に変わって、新しい何かを創り出していくということです。そういうことがすごく重要なのではないかと考えています。また、そういうことができるようになるということを大切にしたいと思っています。

その中で、今私たちがすごく多く悩んでいることは、先ほど文化圏のことがありましたけれども、トムリンソンという人が言った「生活世界の植民地化」ということです。

つまり、ある集団がどう生きていくか、どうやっていくかということを、自分たちの本音で話し合っ
て決めていくことができない。「こういうのがすてきな生き方だ」というのを誰かが決めてしまって、それに従うしかない。そうするといろんなところでぎくしゃくしてきて辛いことが起ってくる。そして世界中のものが、はっきり言ってしまえば、ナンバーワンから最後まで縦に並んでいく。そういうようにはしたくない。

平和運動とか、環境保護運動とか、女性運動とか、少数民族の解放とか、福祉の運動とか、マイノリティとされている人たちが、そうではない人たちとうまく交流をしながら、問題の形を変えてうまく解決していく。そういう人たちの生き方というのが「生活世界の植民地化」からの脱却の姿なのではないか。トムリンソンは、そういうことをやっている人たちがいるということを示唆していたと思います。

そういう部分が、皆さんが関心を持っている「地球市民」を考える上ではとても重要なのです。文化ということを縦割りで考えるのではなく、今皆さんがなさっているように、いろいろな文化やいろいろな言語、例えば価値観・生活スタイルなど、さまざまあると思うのですが、さまざまなものを持っている人たちが、誰かが持っているものを優秀だと決めずに、共通のテーマのもとで話し合っ
て、そして解決していく。そういう解決の仕方が求められているものの中で、一番私たちに近いのは、多分地球規模の課題ということになるんだろうと思います。

今、「公共性」とか「公共圏」がとても話題になっていますけれども、皆さんの活動のように、異なるものを持つ人たちが、一つの課題を解決するために、対話をしながら何か新しいものを作っていくという、つまりその運営の仕方、それからその活動の組み方というところに、「公共圏」が現実化する要素があると思います。

皆さんもそうだと思いますが、ある大学で研究活動をしている、ある仕事を持っている、そして今この研究会にいる、その他の活動もしてい
らっしゃるかもしれない。いくつもの対話のできる環境、それを何と言ったらいいでしょうか、「コミュニティ」と言ってもいいと思いますし、もうちょっと経済観念を入れてきて、「コモンズ」的なものという人もいますし、「市民運動」と言う人もいますし、そういうものをいくつも持っている。

私が、あるいは皆さん一人一人が、自分がネットワークの編成者になって、いろいろな集団に参加しながら、そこで対話を組んで、自分自身を鍛えながら、それぞれの集団が持っている課題の解決に参加していく。そういうことをすることによって、私という（私はアイデンティティの束としての私だと思っていますけれども）アイデンティティを鍛え、それを総合したものが、恐らく「地球市民」的アイデンテ

ィティになるのかもしれませんが。

一つのところに入りきってそこから出ないというのが危険だというのは、例えば、ある民族の集まりであるとすれば、何かこう、取り分けて優れた民族であると思い込んでしまうとか、ある何かを絶対視してしまうことになる。その絶対視によって相対化が阻まれる。そうすると、「私の意見は正しいのになぜお前は従わないのか」ということになり始めてしまいます。

そうではなくて、いろいろなところに参加しながら、自分自身を鍛え、同時にネットワークを作っていく。そういうネットワークによって、いわば「公共圏」のネットワーク化が一方で行われて、しかも、その中の主人公である一人一人が、幾つもの集団に参加することによって、自分を中心としたもう一つのネットワークをつくることになる。そういう風になることによって、みんなにとって少し風通しのいい生き方ができる。

そういう人間形成が進んでいくと、皆さんが考えている「地球市民」という課題に近くなっていくのではないかと思います。したがって、いただいたペーパーの中に、私がこだわるテーマがかなり入っていきまして、そういった有用なことを皆さんが話し合っていることそのものが、既に地球市民的なのだろうと思います。

最初、環境問題で話しましたから、落ちは環境で落とさないともういから、そこにもっていきます。

私はエコロジストとしてはとても鍛錬の行き届かない、ダメなエコロジストです。なぜかといえば、バツタという細く長い足を持っている昆虫に弱いんですね。蛇とか爬虫類とかは平気で、爬虫類は可愛いなとかと思いますが、長い足の昆虫はダメなんですね。かぶと虫などは可愛いなと思うんですが、足の細い昆虫は触ろうとしても触れない。

その程度なんです、今、私は虎を絶やさないための活動というのに強い関心を持っています。シベリア虎（アムール虎とも言われますけれども）がいて、北朝鮮と中国にも生息しています。恐らくシベリアタイガーだけで300頭ぐらいと言われていますが、その大半が現在のロシア連邦のシベリア部にいます。その虎たちが、今段々減っています。アムール豹というのは、ほとんど絶滅に瀕していま

すが、併せて虎も危ないと言われています。

なぜ危ないかというと、森林伐採と密猟が原因です。ペレストロイカでソ連邦が解体したときに密猟者がすごく増えました。一頭の虎をしとめると、4年分ぐらいの年収になると言われまして、国内だけではなく、国外からも密猟者が入り大被害を被った。今、虎は漢方薬の原料として注目され、ニューリッチの人たちが漢方薬を求めるために、密猟のターゲットになっていると言われています。

もう一つは森林伐採です。森林伐採から虎を守るために、ロシアのNGOと国際機関とアメリカの自然保護団体と日本の自然保護団体が力を合わせています。これも一つの地球規模の生態系保護です。虎がダメになるということはほかの動物も食物連鎖がありますからダメになっていくということでもある訳ですから、私たちとも直接的にかかわり合いがある訳です。

シベリアの木材と紙というのは大変な資源なんです。熱帯雨林の方を大分崩してしまったものですから、残るはシベリアにあるという訳です。このために世界のさまざまな資本が熱い眼差しを送って開発をねらっている訳です。

そうすると、そういった開発の方もグローバルに展開する。生態系保護の方もグローバルに展開する。そのせめぎ合いの中で虎の運命はいかにということになるのですが、それは虎だけではなくて、私たちの運命でもある訳です。そういったところで、皆さんの活動も、虎のためにやっている訳ではないけれども、虎と無縁ではない。そういった事態が進んでいるのではないかなと思います。

概念をきちっと立てるとというのが私の仕事だったのかも知れないのですが、偏差値風に、「関さん、あなた地球市民度1ですよ」というような事態はイヤだなと思い、できるだけそういう概念化は避けたお話をしました。皆様から質問や反論をいただいて、「対話」ができることを期待しています。ご静聴ありがとうございました。

「市民社会？西洋の論理と中国の現実」

Lorenz Bichler
ニューヨーク大学客員教授



はじめに

SGRA の第一回研究会にお招きいただき、ありがとうございます。このような機会を与えていただき、大変うれしく思っております。

本日、私たちは「地球市民」について考えるために集まっています。ヨーロッパ人である私にとって、「地球市民」というものは、国境や文化を越える個人の役割を示しています。魅力的な概念ではありますが、本日の発表では、ヨーロッパの学者が「市民社会」と呼んでいる、一つの概念に沿って、個人が集まって作った集団の役割についてお話ししたいと思います。

「市民社会」の定義

西洋の学説によれば¹、「市民社会」とは、資本主義の発達過程における四つの組織あるいは制度によって定義することができます。すなわち、キリスト教会、労働組合、商工会議所、そして新聞です。これらの組織は市民によって構成され、基本的に政党や国会などの国家組織とは別の空間を形成しています。「市民社会」という概念が、文化的かつ歴史的にどのように制限されてきたかを示すためには、キリスト教の教会の役割を指摘したいと思います。17世紀と18世紀のヨーロッパ諸国における教会の果たした機能は、東ア

ジアにおける宗教の役割と比較することができないということに、おそらく皆さん異論はないでしょう。

本日、私は二つのポイントを指摘したいと思います。最初のポイントは、西ヨーロッパに存在する「市民社会」と比較できるものは、中国に存在しないということです。

第二のポイントは、中国の最近の12年間の政治的發展に関連します。今日、共産党は、公的な政治経済の議論に、以前よりたくさんの人々を招き入れているように見受けられます。この変化は、私が「国家主導型市民社会」と名づけた構造の中で起こっています。

天安門

さて、最初のポイントから始めましょう。西洋で定義される「市民社会」というものは中国に存在しないということを説明したいと思います。

1989年の夏、北京で、学生、労働者、学者やジャーナリストたちがデモを行いました。共産党前総書記 胡耀邦の死が、反対運動のきっかけでした。最初のうち、学生たちは、改革開放を推奨するこの指導者の死を追悼したかっただけでした。学生たちは、改革開放の方針が継続されることを熱望していました。

デモの参加者が日ごとに増えていくのを、ヨーロッパやアメリカは注目していました。5月4日までには、学生だけでなくジャーナリストや有名大学の教授も加わっていました。そして、あの、決して忘れることのできない、有名な、愛国的な事件が起きました。

¹ The most comprehensive early debate on the topic can be found in Issue Nr. 19, 1993, of the journal *Modern China*. See especially the article by Frederic Wakeman, Jr., "The Civil Society and public Sphere Debate, Western Reflections on Chinese Political Culture."

共産党の機関紙である人民日報は、4月26日の社説で、デモは共産党を倒そうとするものだを書いていましたが、学生たちは聞き流していました。学生は、自分たちの運動は正当なのだから、続けていくべきだと感じていました。5月になると、対立は激化し、何人かの学生がハンガーストライキを始めました。別の学生は政府と対話しようとしていました。天安門広場の西側にある人民大会堂の階段にひざまずき、政府に対話を求める請願を手渡そうとした人たちもありました。彼らは儒学者の服装をし、その儀礼に従ったのでした。国家を正すため、彼らは為政者に忠告しなければならないという責任を感じていました。この時、学生の純粋な示威運動と勇気こそが、絶対的な政府に挑戦することができたのだと、私は思います。

しばらくして、偉大な国家も、我慢ができなくなりました。6月3日、皮肉にも「人民解放軍」と呼ばれる軍隊が広場に侵攻し、何百人もの人々を殺傷しました。崩壊の後、中国ウォッチャーは、あんなに素晴らしいスタート



を切ったのに、どうしてこのようになってしまったのかを考えました。人々は、改革開放を推奨していた鄧小平が、何故、武器をもたない学生に対して、軍に発砲するよう命令した

のか理解できませんでした。鄧は、学生や海外の支援者たちは、共産党を倒すということ以外は何も考えていないと確信していたのでした。彼は、これは対話の問題だということを決して信じませんでした。また、学生たちが提起している問題について、共産党の方がより良い解決方法を知っていると信じていました。10年以上もたった今でも、中国の多くの人々がこの考えに賛成しているようにみえます。更にもっと興味深いことは、迫害を逃れて海外へ脱出した学生たちの

一部が、ビジネスのために帰国し始めたことです。あのような大規模なデモンストレーションと学生の結末にもかかわらず、彼らは市民社会の教会や労働組合にわずかでも似ている制度や組織に頼ることができませんでした。政府機関の他には、市民のスペースが何もなくあったからです。学生が実際に、そして象徴的に占拠した場所は、国家の中心、首都の中心であり、学生はそこに居たかったのです。彼らは政府と話したかった。政府をより良くするために提言したかった。しかしながら、西洋の市民社会のように学生と政府が対峙する二つの集団だったのではなく、学生は政府の一部になろうと努力していたのです。

ここで、同じ1989年のヨーロッパと比較してみましょう。ハンガリーが国境を開放して間もなく、東ドイツでデモンストレーションが始まりました。人々は議論をするために、定期的に教会に集まりました。社会主義国家の枠組みの中でも、教会は正当に認められた制度でしたが、国境を越えた領域としての本来の教会の機能を、どうにか保っていました。教会は、何年もかけて、市民のネットワークを築くことができました。それは、純粋な信仰というよりは、党の支配する国家の外のコミュニティを求める人々によって為されたことでした。

市民社会のもうひとつの重要な要素は、労働組合です。1989年のポーランドにおけるベルベット革命（非暴力革命）が成功したのは、主に、「連帯」（ソリダルノスチ）運動のおかげです。つまり、東ドイツの教会や、ポーランドの労働組合は、共産党体制以前からある制度と連携することができたのです。このことがなければ、改革は成功しなかったでしょう。

中国の場合

さて、中国の場合は、非常に長い歴史をもった伝統的な知識人層が確立しており、それが市民社会の台頭を困難にしています。西洋の市民社会でさまざまな役割を果たしている最高レベルの知識人たちは、中国では、ほとんど全員が政府に務めているからです。これは、共産主義の目標に大に関係しています。しかしながら、このように考えると、どうも、一人前の市民社会は中国にはまだまだ現れないのではないかとさ

え思えてきます。

国家主導型市民社会

ここからは二つめのポイントについて考えてみましょう。ここでは、「国家主導型市民社会」という概念を使って、今日の中国の社会と市民意識について分析したいと思います²。今日の中国には、幾つかの違ったタイプの国家主導の市民団体があります。たとえば、社会团体と呼ばれる民辦 minban（民間人によって運営される組織）がどんどん増えています。しかしながら、本日、私は、特に、党の体制に極めて近い一つの国家主導の市民社会制度について強調したいと思います。それは、いわゆる「内部の出版」とよばれる党機関誌です。

党機関誌の歴史

共産党にとって新聞は最も重要な道具とされてきました。新聞に対しての規制の強さは、極端に厳しいということを疑う余地はないでしょう。



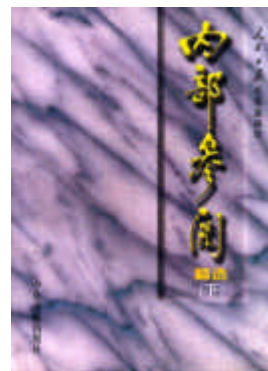
中国の国家主導型市民社会の事例：党機関誌（内部刊物）

しかしながら、これからご紹介する二つの出版物については、幾つかの新しい兆候を見出すことができます。

一つは、上海で発行されている「宣伝通訊³」です。表紙には「極秘扱い」と注記されていますが、ここ数年、幾つかの図書館で閲覧できるようになりました。更に、このコピーが製本され、興味のある人はほとんど誰でも入手することができますようになりました。この機関誌は、党のプロパガンダについて、かなりセンシティブな記事を取り扱い、しかも、一般公開されている印刷媒体よりもず

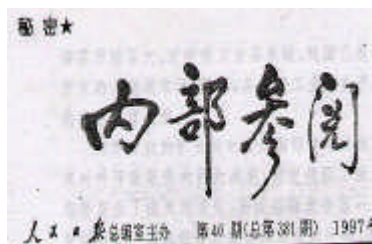
っと自由な議論が展開されています。この冊子を購入しやすくすることにより、国家主導型の市民社会はますます強化されていきます。なぜならば、より多くの人々が組み込まれ、社会の要求に合致させられていくからです。読者は、国家主導型市民社会の参加者になるかも知れません。

二つめは、共産党中央委員会によって北京で発行されている「内部参関⁴」です。1998年3月、この「秘密の」出版物が1万部発行され、北京市内の幾つかの本屋で販売されました。本来の発行部数が約500部⁵という事実を考えれば、この時



の出版数が一万部というのは、非常に多いと考えるべきです。ここには、経済や政治に関する様々な記事が含まれており、しばしば非常に新鮮で直接的な問題提起がなされ、言葉の使い方についても抑圧的な制限から少し緩和されています。

このような出版物に対する制限が緩和されて、より多くの人々が議論に参加できるようになったことは歓迎すべきでしょう。



私の二つめのポイントをまとめますと、共産党機関紙のレベルでは、中国の公の議論が開放されつつあるという

ことが分かります。現在のところ、これらの機関誌は、党によって厳しくコントロールされており、したがって、国家主導型市民制度の一部に過ぎませんが、このような発展は、より広い市民スペクトルへ発展していく可能性を含みます。

²See Michael B. Frolic, "State-Led Civil Society" in *Civil Society in China*, edited by Timothy Brook and B.

Michael Frolic Armonk, New York, M.E. Sharp, 1997

³中共上海市委宣传部<宣伝通訊>編集部編「宣伝通訊」上海市机要通信局

⁴人民日報総編室「内部参関精選」中央文献出版社 1998年3月第一版

⁵人民日報総編室主辦「内部参関」

新しい潮流の出現

最後になりますが、「中国の市民社会」を考えていく時、次の二つの大きな問題が残っていることを忘れてはならないでしょう。

- 1) 国家主導型の市民社会から、西洋的な市民社会へ変革することは可能でしょうか。
- 2) 西洋的な市民社会は中華人民共和国にとって魅力的で実現可能な形態でしょうか。

ご清聴ありがとうございました。

「近代以前の日本と＜公共＞性」

高 熙卓

東京大学総合文化研究科博士課程

只今ご紹介に預かりました、高熙卓です。今日は、近代（明治）以前の日本における公共性探求について発表させていただきます。

一般に明治以前というと、武士の世の中といわれ、また士農工商という強固な身分秩序システムの存在やさまざまな宗教・思想の統制などが行われた「封建時代」といった印象が強いと思います。また公共性と類似の概念としての「公」は、日本語で「おおやけ」と読みますが、「お上」、あるいは Official な性格に近く、しかも「滅私奉公」という言葉によく表れているように、公共性探求と緊密につながる「私」の存在はネガティブなものとしてしか見なされなかったため、一般的には、明治以前の日本において公共性探求とその精神の発見は期待できず、公共性という言葉さえも西欧からの輸入された Public という言葉の訳語にすぎないとされてきました¹。



しかし、果たして本当はどうでしょうか。上の図

は、17～8世紀に世界最大級の都市と言われました江戸の様子を伺うものとして取り上げました。商店街とその賑わいが何を意味するかということをお話ししたいと思います。まず、17世紀以降における商品経済の本格的な展開があります。金融・商品経済の全国的なネットワーク、あるいは都市の膨張等がもたらした大きな社会変動がありました。その中でこの発表とかかわる重要なものとして、為政者の学問と言われてきた儒学が民間に普及し始めたので



す。その中でとくに民間学者による「公・私」「天下」「王道」などといった儒学の伝統的な概念に対する読み直しが行われました。このような解釈学的な営みについて、単なる儒学のなかの論争に止まらぬ、社会的・政治的な意味をもっと明らかにするべきではない

でしょうか。ここでは、そのモデル・ケースとして伊藤仁斎（1627- 1705、以下仁斎と略する）という民間学者の「天下の＜公共＞」思想について考察し、その思想と公共性探求とのかかわりを探ってみたいと思います²。

まず、儒学の民間への普及や「民間」学者の出現というのはどのような思想的意味をもつのでしょうか。それは、従来の武士を始めとする為政者の視点から捉えた儒学ではなく、町人を始めとして一般人の視点から倫理や政治の世界を捉え直すこ

¹ 公共性と public との混用などの問題点を指摘しているものとしては、東島誠『公共圏の歴史的創造』（東大出版会、2000）の第5章公共性問題の輻輳構造が参考になる。

² 以下の仁斎論は、主として拙稿「伊藤仁斎の「王道」論 - その政治思想的意義について」『倫理学年報』No.47、1998 に依拠した。

とにつながるものでした。その捉え直しによって、「天」の下ではみんな平等なのだという考え方が具体化されていき、身分秩序システムを相対化していく可能性も出てくるわけです。そうした捉え直しが可能だったのは儒学が幕府公認のイデオロギーではなかったという当時の日本の事情もかわっていました。中国・朝鮮と違って儒学試験で官僚を選抜する科挙制度もなく、そうした捉え直しに対する思想的・政治的な干渉も比較的弱かったという歴史的文脈もあったわけです³。

その捉え直しは、「古学」と呼ばれる、主として本来の儒学への回帰運動の形を借りて行われましたが、そのなかで仁斎は一種の儒学ルネサンスともいえる「古義学」という新しい学問のあり方を提示しました。というのは、儒学に限定すれば、当時の学問において主流といえるものは中国・朝鮮伝来の朱子学でした。ところが、仁斎の「古義学」はその朱子学に正面から挑戦するものだったのです。従来、朱子学は儒学の古典である



『論語』『孟子』などを朱子の解釈を通して接する仕方をその方法の基本としていましたが、仁斎によれば、その方法ではあくまで朱子のバイアスがかかったものにしかならず、本来の古典の真意や本当の儒学の意味などが隠されてしまう。直接古典に当たってこそ本来の意味を探ることができるというのです。

ここで参考のために朱子学の概要について見てみましょう。朱子学は10 - 12世紀の中国、すなわち宋時代に内外からの危機的な状況に対処するために起こった思想運動であって、従来の詩や文章を重んじる文学的な儒学から、社会・政治的文脈にかかわる儒学へと儒学のあり方を転換させたといわれています。その核心は、ご存知の「修

身・齊家・治国・平天下」という有名な文句にその考え方がよく示されています。自分自身の道徳的修養をベースとして社会の在り方を問い直していくことができる回路をつくったわけです。それによって、科挙を準備する予備官僚をふくむ為政者層に新しい使命感を喚起し主体化させる働きが現れました。しかし他方では、商品経済化などの社会変動による一般人の積極化やそれに伴う身分秩序システムの動揺を否定的に捉え、所与のシステムを「天理」と合理化して、そのシステムの動揺を最小化させる側面もありました⁴。

こうした朱子学に対して仁斎は、一方では身分秩序のシステム＝「天理」とする保守的性格や、すべての事柄が個人道徳の次元に還元されてしまうことは朱子のバイアスによるものだと批判しながら、他方では原始儒学そのものに為政者層のみならず一般人も主体として立つ可能性が秘められていたと指摘しています。仁斎の「古義学」とは、儒学古典の再解釈を通じて朱子学を換骨奪胎し、そのなかで仁斎自身のいう「天下の＜公共＞」思想を宣言するものでした。

では、その「天下の＜公共＞」思想のもつ思想史的な意味を、仁斎による「公・私」「天下」「王道」などの儒学における核心的な概念の読み直しの例から考えてみたいと思います。

第一に、「公・私」の読み直しについて。仁斎は、朱子学の、いわば「公的領域」の「私的領域」に対する絶対優位を確認するようなものとしての「天理の公」という考え方を否定しています。もちろん「天理の公」を否定したからといって、「公」そのものを否定したというわけではありませんが、一方で「公」のあるべきあり方への要求を出しながらも、他方では、それまでの「滅私奉公」的な「公・私」のあり方に対しては強く批判し、「私」への不当な干渉を拒否する姿勢を示しています。こうした「公・私」のあり方への読み直しには、従来蔑視されがちだった「私」の存在を積極的に主張するものにつながる可能性が孕まれていたといえるのではないのでしょうか。

³ 渡辺浩『近世日本社会と宋学』（東大出版会、1985）参照。

⁴ 島田虔次『朱子学と陽明学』岩波新書、1967 参照。

第二に、「天下」の読み直しについて。従来「天下」というと、為政者の視点からの「天下」といった意味合いが強く、そのなかでの一般の人々は単なる統治の対象にすぎませんでした。「知足安分」という文句にも表れているように、そうした考え方では、一般人は自分の地位や役割に満足することが望まれていました。しかし、仁斎は「天下」はみんなの「天下」なのだ、だから「天下」は特定の集団のためではなく、「天下」のみんなのために運営されるべきであり、そのためにも「王道」という古代中国の理想的政治は謳われているのだということです。

これによって、第三の「王道」の読み直しにつながるわけですが、「王道」というと、古代中国における「哲人政治」ともいえるもので、儒学における理想的政治像を指すものです。ところが、従来はその理想的政治の実現はあくまで一般の人々が素朴だった古代中国に限られたもので、そうではなくなった当代においてその実現は為政者の如何に任せ、一般人は良し悪しを問わずその現実を運命論的に受け入れざるをえないと教えられていました⁵。しかし仁斎は、その「王道」を徹底的に一般人中心に読み変えました。古代中国における理想的政治像は時空を越えたモデルであって、為政者はそのモデルに近づくために努力するのが本来の使命であり、さらには、一般人のほうから政治の在り方に対して問い直し、場合によってはその是正のために一般の人々も政治の世界に参加し、そのなかでそれを実現していくものだという果敢な解釈まで提出したのです。

仁斎は、はじめは敬虔な朱子学者でした。10余年間の思想的葛藤を経るなかで仁斎の朱子学批判や「天下の〈公共〉」思想は確立されたわけですが、その作業はこうした解釈学的な作業を通して行われました。その核心は、為政者中心の「公・私」「天下」「王道」思想を一般人中心のそれへと転換させたところにあったのです。それによって、従来受動的・消極的だった一般の人々を倫理的・政治的主体に自覚・成長させ、そのなかで世論政治へとつながる、しかも不当な権力行使や権

力そのものに対してはそれを拒否・交替する運動の可能性も示唆されたと捉えられるのです。

仁斎自身は平生、諸侯の招聘にも応じず、民間での教育活動につくしたのですが、こうした仁斎の「天下の〈公共〉」思想は、その後の〈公共〉性探求をめぐる思想の展開にベースの役割を果たしていったと捉えられます。その後の展開は、例えば政治の世界において〈公共〉性探求の領域を開いたといわれる荻生徂徠(1666 - 1728)をはじめとして⁶、明治以前の日本において政治・経済、都市・地方・農村、民族・文明をめぐる〈公共〉性探求の歴史として捉え直すこともできるのではないかと考えています。



この写真は、荻生徂徠と弟子たちの、塾の授業の質疑応答の様子なのですが、一般的に考えられがちな、上から一方的に教えるというスタンスではありません。みんなが丸く集まって、対話し、討論しています。

明治以前の日本においては、政治経済、あるいは都市・地方農村、さらには、民族文明をめぐる公共性の探求がそれなりに行われていました。私自身は、いわゆるpublicという西洋的意味の公共性そのものではないけれども、あえて言えば、ユルゲン・ハーバーマスのいう文芸的公共圏という概念もありますけれども、そういう意味も含めて、明治以前の日本を対象として、公共性を語れる可能性は大いにあると思っています。近代西欧からの輸入ものではない、〈公共〉性の問題を考察することを通じて、明治以前、ひいては東アジアにおける公共性探求を考えるひとつの材料になるのではないかと思います。

⁵ この側面を徹底化した思想家が本居宣長だとも捉えることができる。

⁶ 荻生徂徠のそうした側面にかんする研究としては、丸山真男の『日本政治思想史研究』(東大出版会、1983新装版。初版は1952年)参照。

【司会】それでは、三人の先生方の講演・発表に対して、ご質問ご意見をお伺いしたいと思います。時間が限られておりますが、できるだけ多くの方のご意見を伺いたいと思いますので、質問は手短にお願いいいたします。

【徐】立教大学の徐向東と申します。

最初に関先生に対して質問したいと思いますが、先生のお話は私にとってとても新鮮であって、特に人間形成と地球市民というそのつながりが面白いです。後半に「対話」という言葉が出てきてほっとしましたが、一番最初、地球市民に対する定義の所で「開発」という言葉をお使いになり、その後で生態系のお話も入れていただきました。しかし、僕は「開発」という言葉に抵抗がありまして、そこに例えば生態系の問題が含まれているとしても、どうもエリート意識が強くて、エリートの人が非エリートの人を「開発」するとか、あるいは地域・国家観の問題もそうなんです、例えば先進国家がそうでない国家を「開発」するとか。なぜ、後半に使われた対話という言葉、定義のところでお使いにならなかったのかということをお伺いしたいです。その中に何か特別な意味合いがあったのでしょうか。

次に、三番目の高さんに伺います。「儒学ルネッサンス」と言う言葉は高さんが自分で作ったものですが、ここで高さんが言っているのは日本的な儒学なのか、それとも中国の儒学に対するルネッサンスなのか。僕の理解では、恐らく日本に伝来して日本化された儒学に対するルネッサンスだと思いますが、そうでない場合は、僕は多分賛成できないと思います。

最後に、明治以前の日本を対象に＜公共性＞を語れる可能性は十分に大きいというふうにおっしゃいましたが、それは「天」が上にあってその下にある公共性で、これでお互いに平等であるということですか。上に天があるとしたら、それはある種の限定された公共性ではないかというふうに理解してよろしいのか教えていただきたいと思います。そうした限定された公共性であれば、特に、明治維新後の日

本の歴史的な発展を考えると、やはりそういうふうな感じはしております。

【関】ご質問いただきましてありがとうございました。今質問して下さった方と、ほとんど考えていることは同じだと思います。

ただ、なぜ「開発」という言葉を強いて使ったかと言いますと、先ほども少し話しましたように、先進諸国が、発展している国と発展していない国をわざわざ作り出した訳です。「君たちは未発展だよ」ということは、発展ということを言い出したことによって生まれた訳です。だけれどそういうふうに言われてきた人たちが、自分たちで自分たちの将来を考えていかなければならない。そこで「開発」という言葉の中に込められたさまざまなファクターを、彼ら自身が自分たちの文法で読みかえて未来を作って行こうとする動きが出ている訳です。それをサポートしようとする人たちも現れている。そういったところに目配りをしたいという気持ちがあって括弧付きで開発という言葉を使いました。短い時間で、不親切な使い方だったかと思いますが、気持ちとしてはそういうことです。

【高】日本化された儒学という意味合いではそうではないですが、普通こういう発表をしますと、中国儒学が日本儒学によって批判されているというふうにつまみ食いされ、つい「そうだとすれば、困ります」と言われたりします。しかし、一つのコンテキストとして言えるのは、先ほどの発表でもありましたように、科举制度の問題があると思います。科举制度もなく、儒学が体制公認イデオロギーでもなかった日本では、儒学が早くから多様に展開されていました。中国にはそのような展開がないという訳ではありませんが、少しは遅れていると捉えられるかも知れない。とはいえ、清時代に入ると本格的に、民間の方で多様な儒学の読み直しが行われていったとは言えます。これでよろしいですか。

【徐】お話を伺っていると、それはあくまでも天皇の下の公共性ですから、これは一種の限定された公共性なのではないかという質問ですが。

【高】天皇の下？

【徐】上に天があり、天の下に公共性があるというお話ですね。やはり上には天皇があると。

【高】いいえ、違います。天皇じゃなくて天ですね。いわゆる大自然といいますか、中国的意味合いに於いての「天」です。

【徐】そうしますと、例えばこの伊藤仁斎という人が言っている公共性は、天皇も含めてみんな四民平等だということですか。

【高】そういうことまで含まれると思います。

【徐】専門ではないですが、当時の日本の儒学は、そこまで進歩していたのですか。

【高】私はその可能性は十分あったと思っています。この辺は、あまり注目されていなかったのですが、早くからの日本儒学の多様な展開をいかに捉えるかといった問題は重要な問題です。念のために私の論文を挙げていますが、私のこうした捉え方が全面的に支持されているとは言えませんが、研究者の中でもこういう意見はある程度認められているとは言えます。日本の江戸時代全体の表象とは言えないかも知れないのですが、全体の流れはそうであったと言うことです。それがいろんな過程を経ながら、明治まで流れていったというふうに思っています。これでよろしいでしょうか。

【司会】よろしいでしょうか。ほかにご意見、ご質問はありますか。

【文】東京大学の文と申します。最初、ローレンツさんに質問します。

具体的に、一番最後に二つの大きな問題ということで、国家主導型の市民社会から西洋的な市民社会へ変革することが可能かという問題が出ていますが、私がちょっと分からないのが、実際、市民社会を主導するのが誰かという問題じゃなくて、国家主導の社会が、具体的な社会の内容としてはどういうことであって、西洋の市民社会の具体的な内容というのがどういうものを表しているのか、どの変化、どこ

からどれが変化したかというのを、ローレンツさんはどう考えていらっしゃるのか伺います。

高さんにも一つ質問があります。私も全くこの分野は知らないのですが、江戸時代、明治以前の公共性を語るということが、ある意味では西洋的なフィルターを通して、そういう江戸時代を分析しようとしているということはないでしょうか。

【ローレンツ】中国の現在の状況は、国家主導型の市民社会です。つまり、国家によって生み出された市民社会で、国家と密接に関係しています。しかし、西洋では、市民社会というものは国家に対するものとして存在しています。市民社会は、国家とは明らかに違うスペースを占めているものなのです。

一方、中国では、そしてある程度日本でも、新聞や労働組合のような市民社会の要素はあるのに、それらは国家や党に密接につながっていて、国家と市民社会をはっきりと区別することができません。

ここで問題となるのは、このような形は文化的な差異だと認め、東洋ではヨーロッパで育った西洋型市民社会のモデルを必ずしも採用する必要はないのではないかということです。この問題に簡単に答えることはできませんが、私が少しばかり知っている中国と日本には、国家に対して独立している市民社会というものはないということだけははっきりしています。

【高】いわゆる、西洋的な近代を普遍的な近代モデルにするといった発表のモチーフではないかという質問だと思いますが、結論から言いますと、意図としては全くその反対です。しかし、そう受け止められたのは、多分＜公共性＞探求をどのようなコンテクストにおいて捉えるかの差によるものだと思います。

つまり、西洋近代のもたらしたいわばプラス面を否定すべきではないということは明らかですが、むしろここで私が西洋近代は普遍的な近代ではないと言っているのは、西洋近代化によって失われた何かのためなのです。日本のみならず広く言って、東アジア的な近代化は何だろうといった問題を考えていく場合は、西洋的な、たとえば関先生もおっしゃったような「自立した絶対的な主体」の問題は再考せ

ざるをえない。その「自立した絶対的な主体」それ自身は、西洋でも「本当なの？」と言われているようで、東アジアでは全く無縁です。どうしても、共同体というか、もっと広い意味での公共圏というか、その人々の関わりの中でその公共性探求が行われています。そうした特徴を私なりに、これまでのモデルとは違う捉え方で見つめ直そうとしているということです。

【司会】時間の関係もありますが、もうお一方ぐらいどなたかいかがですか。

【李】立教大学大学院生の李鋼哲と申します。S G R A研究会のメンバーの一人です。関先生へ質問させていただきます。

関先生は、現在主に周辺部、あるいはマイノリティが中心になって、グローバル化市民社会への潮流が一番進んでいるとおっしゃった、というふうに僕は受け止めました。現実にはそういうところがあると思います。周辺部から、あるいはマイノリティから、中心部あるいは発達地域にきた人たちは、普通、さまざまな言葉を話せるし、異文化も理解できる。そうしてみた場合、マイノリティ社会、あるいは少数民族、周辺部のその社会で、その外へ出られない人々の市民社会への、あるいはグローバル社会への転換、あるいは発展はどうなるかというのが一つの質問です。

もう一つは、これとは全く逆で、マジョリティ社会、特に地球上で一番マジョリティと言われている英語圏の社会、特にアメリカ人。よく言われるように、こういう人たちは、英語をしゃべれば世界中どこでも通じるから、他の言葉を勉強する必要もないし、他文化に対する理解もそんなに迫られていない。アメリカもそうですし、日本でもこういう現象があると思います。つまり、別の角度から見れば非常にグローバル社会で先端を走っている人なのに、多言語も多文化も必要ではないということが一般的です。やはり日本は発達しているし、日本の中で単一民族の中で暮らしているから主に日本語中心です。中国社会でも漢人社会ではそういうふうになっていますね。こういう二つの問題をどういうふうに理解して良いのかという質問です。

【関】どうもありがとうございました。

前者の方は多分、アーミッシュとかそういった特別の宗教、あるいは生活スタイルを持っていて、自分たちの生活の自己完結性を崩そうとしない人々の集団を指しているんじゃないかと思います。恐らく、私が地球市民について話した内容は、文化が異なった人たちの間の接触とコンフリクトということを前提として話したので、申し訳なかったんですが、最初のご質問の部分は含まれていませんでした。

でもそれは重要な指摘だと思います。恐らく今、グローバル化の中で、ある集団内での自己完結性を守ろうとする人たちに対して、その完結性を崩させよう、開かせようとする大きな力が働いていると思います。そういう力が働いたら、そこで、先ほどの「開発」ではないですけど、ある人たちの意図に従った生活スタイルの導入が促されるという事態が起るわけで、その時、今日の話の中身にかかわって来るのだと思います。

それから、後者について言いますと、アメリカの場合、多文化社会・多民族社会で、しかもその最先端を行っています。そしてアメリカの人たちはもちろん私のやっているような研究の分野でいうと、自分たちの言語が世界中に通用するけれども、地域社会研究だと、例えば日本人研究者よりももっと地域の言語を習得しています。立場的にはマジョリティですが、言語や文化の習得についてとても積極的な人々も沢山います。

それをなぜ言ったかということ、マイノリティとマジョリティがかかわりを持つとき、マイノリティの方が、地球市民への道において、重要なファクターを持っていると私は思います。しかし、彼らだけであるのではなくて、その人たちの働きかけと、マジョリティ側の働きかけというのでしょうか、相互作用の中で対等な人間関係が対話に基づいて作られていくということが重要な気がしていて、そうであるとする、マイノリティと共にあるマジョリティもまた、同時に地球市民的なプロセスを歩み出すということになると思います。

こういう話をしますと、よく私も反論を受けるのですが、なにかというと、マジョリティに冷たい奴だというふうに言われてしまうのです。マジョリティは永遠にダメなのかと問われます。そういう意味ではなくて、マイノリティの方がそうせざるを得ない要素をたくさん持ってしまうからとお答えします。けれども、マジョリティの側は、マイノリティと一

緒に活動することによって、例えば、識字活動とかいろいろあると思いますが、そういう活動の中で自分自身の方をも変えていくことができれば、お互いに、文化や言語や、さまざまなその仕切りを越えて、豊かになっていく可能性があると思っています。

【高玲娜】中国からの留学生、高玲娜と申します。ローレンツさんの講演について質問します。

中国には市民社会がないということを言われました。それから、市民社会と地球市民、今、二つの概念があります。また、中国は資本主義社会がなかったから、それで市民社会が存在しないというお話もありました。今、議論しているのは地球市民ですけど、例えば市民社会がなかったとしても、地球市民になれるでしょうか。

このことは、高さんの発表とも関連します。例えば、日本には、明治以前に＜天下の公共性＞があった、儒学の思想もあった。その儒学の思想はもともと中国から来た。倫理道德とかいう思想もあった。では、そういう公共性の思想が、国家とどういう関わりで存在していたのか、もう少し教えていただきたいと思います。

【高】中国から出た朱子学というのは、ものすごく潜在的な可能性を持つものでした。朝鮮にも日本にも他の東アジアの国々にも広く伝播されるほど普遍的な思想だったんですね。しかし、他方では、今日発表でも示したように、一つ、身分秩序に対する保守性の問題を抱えていました。それは官僚たち、あるいは予備官僚たちの考えだったということとも関連するだろうと思います。江戸時代には、もちろん武士とかそういった人たちは朱子学の保守性に全く賛同するはずでしょうが、しかし民間の人たちの立場から見たらそれはちょっと違った角度で捉えられていました。仁斎のような、儒学を通して異議申し立てをするといえますか、そういうことが提起され

ていたのです。そういう意味で、いわゆる＜公共性＞は提起されていたということでした。

【ローレンツ】市民社会と地球市民の関係について、一つの例をあげてみたいと思います。

ハンガリーには1989年の天安門事件以後、中国人がたくさん移住しました。彼らがどんな情報を得ているかという調査があるのですが、テレビは中国国営のCCTV、そして新聞でも中国のオフィシャルな新聞に発表されたものを転載した記事を読んでいるそうです。私にとってはこの調査結果は少々皮肉ではありますが、とても興味深いものです。この中国人たちは自分の国を逃れ、全く別の国へ移住したのですから、地球市民ということもできます。しかし、この人たちは、母国にいた時と殆ど同じ生活をしようとしています。これは一つの小さな例ですが、論理的に、そして厳密に言えば、地球市民も市民社会もどちらも国家にとらわれないということができません。国家から自由であるということですが、どの程度自由であるかということは、大きな問題であり、簡単に答えをだすことはできません。

【司会】どうもありがとうございました。

まだいろいろご質問があるかと思いますが、予定時間もオーバーしていますので、ここで打ち切らせていただき第1回研究会を閉会といたします。

S G R A ホームページには、ご意見を投稿していただく掲示板がございますので、本日の講演についてのご意見なりご質問は、是非そちらに投稿していただき意見交換ができればと思います。

三人の講師の先生方、どうもありがとうございました。

< 講師略歴 >

関 啓子 (せき・けいこ)

一橋大学社会学部卒業

一橋大学大学院社会学研究科修士、博士課程修了。博士(社会学)を取得。

一橋大学大学院社会学研究科助手、助教授を経て、教授(現職)

専門

教育思想史、教育社会学、比較教育学

こだわりのキーワードは、エスニシティ、エコロジー、ジェンダー

著書

「クループスカヤの思想史的研究」(新読書社)(単著)

「人間形成の全体史」(大月書店)(中内、太田、関 編著)

「ジェンダーから世界を読む」(明石書店)(木本、関 編著)

Lorenz Bichler (ローレンツ・ビッヒラー)

1980～1982 中国語研修(スイス国費奨学金)

1982～1987 チューリッヒ大学修士課程

1987～1989 早稲田大学研究生(日本文部省奨学金)

1989～1994 ハイデルベルグ大学博士課程(博士号取得)

1994～1995 東海大学研究員(日本国際交流基金)

1996～1998 チューリッヒ大学中国研究科講師

現在 ニューヨーク大学政治学部客員教授

ハイデルベルグ大学中国研究科客員研究員(ハモンズ財団研究助成)

主要研究

- ・ 中華人民共和国の歴史
- ・ 中国共産党の歴史(特に1949年直後の上海における人口政策について)
- ・ 中国の市民社会出現の歴史
- ・ 中華人民共和国の文化史

高 熙卓 (コウ・ヒタク)

1984～1990 延世大学政治外交学科

1992～1994 日本語研修

1995～1997 東京大学大学院総合文化研究科修士課程

1997～現在 同大学院 同研究科博士課程

博士論文テーマ：江戸中後期思想における公共性探求の諸相について

論文

「伊藤仁斎の「王道」論 - その政治思想的意義について」『倫理学年報』第47集、1998年3月

「徳川17 - 18世紀における秩序論の様相 - 仁斎学と徂徠学を中心として」

『日本思想史学』第31号、1999年9月

「石田梅岩の社会形成論」『科学研究費補助金研究成果報告書(C2 - 0960036)』2000年3月

アンケート集計報告

< 地球市民の認識度調査 >

S G R Aは世界各国における「地球市民 (Global Citizen)」の認識度について研究調査を実施しているところですが、本日の場を借りまして、皆様のご見解もお伺いしたいと思います。ご協力をお願いします。

(1) **私は、二十一世紀はグローバル化が進み、下記の傾向になると思います。** < 二者択一で選択 >

- | | |
|-------------------|-------------------|
| A、民族意識が高まる。 | a、民族意識が弱まる。 |
| B、国家権力の役割が増大する。 | b、国家権力の役割が弱体化する。 |
| C、国境線・国籍が残存していく。 | c、国境線・国籍が消滅していく。 |
| D、一個人としての意識が強くなる。 | d、一個人としての意識が弱くなる。 |

(2) **「地球市民 (Global Citizen)」について、私は次のように考えています。** < 複数回答可 >

- A、単なる理論的概念に過ぎず、実体のあるイメージはなにも連想できない。
- B、二十一世紀に地球市民が必ず誕生してくる。
- C、すでに私たちのまわりに実在していて、世界各地で活躍している。
- D、一部の人が持つ意識 (理想・理念) に過ぎず、実在していない。
- E、地球市民になるには資格条件 (学力、経済力など) が必要だ。
- F、現時点で、「地球市民」を提唱することは意義がある
- G、その他 (詳しくお書きください)

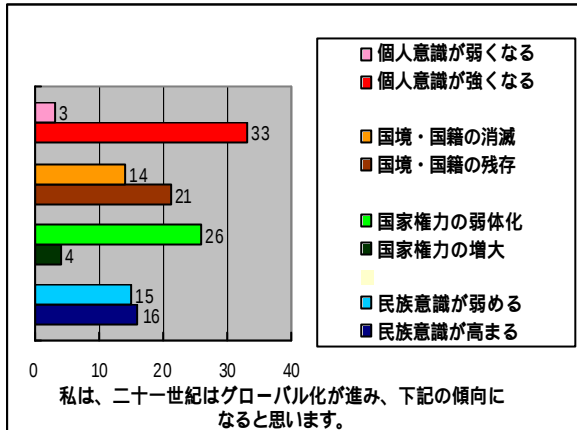
(3) **私は、このライフ・スタイルの人が最も地球市民に近いと思います。** < Fを除き、複数回答不可 >

- A、大手企業に就職して国際ビジネスに活躍する人。
- B、政治家になって国際政治に貢献する人。
- C、市民団体に参加して地域振興・地域環境保護に尽くす人。
- D、オリンピックのメダリスト、ノーベル賞受賞者たる人。
- E、地球人類の一員としての自覚をもって日々の生活を送る人。
- F、その他 (詳しくお書きください)

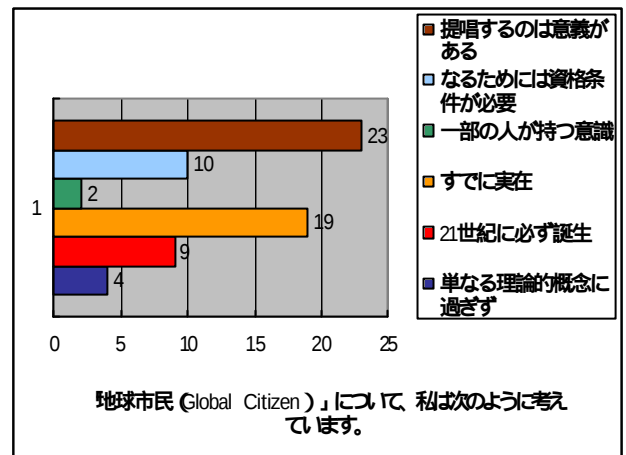
(4) **強いて「地球市民」を定義すれば、私は次の箇条書き定義文に賛成します。** < 複数回答可 >

- A、グローバル化時代に対応して誕生する人類の新しいアイデンティティである。
- B、人種・民族・国家にとらわれず地球規模で物事をとらえる自覚である。
- C、近代市民社会の基本理念である「自由」と「平等」を、地球規模公共圏へ拡大して継承するものである。
- D、民族主義・愛国主義と矛盾しないが、但し相互に異を尊重し合う共生を求める自律的市民である。
- E、地球は人類のものではないという立場にたって、地球上の万類との共生も求める人々である。
- F、その他 (詳しくお書きください)

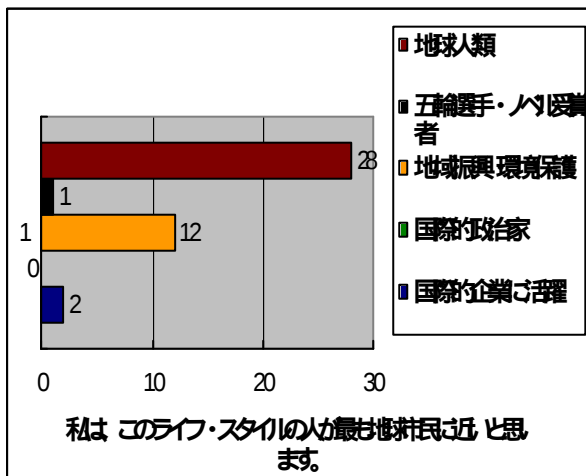
地球市民の認識度調査結果



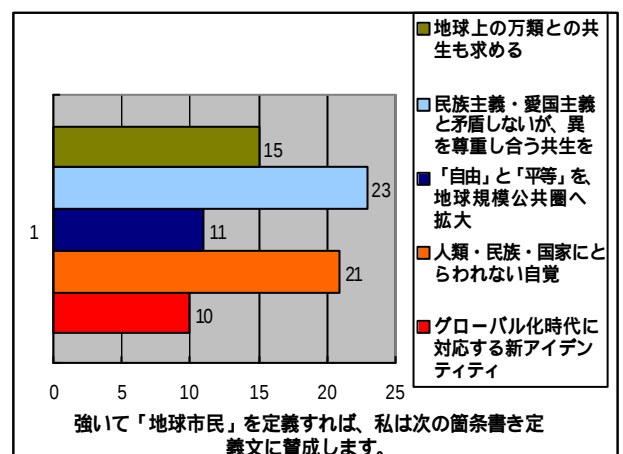
質問 1



質問 2



質問 3

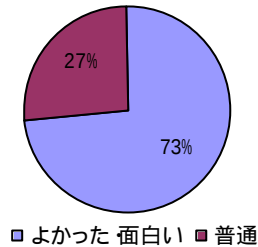


質問 4

第1回研究会「地球市民の皆さんへ」に参加しての フィードバック結果

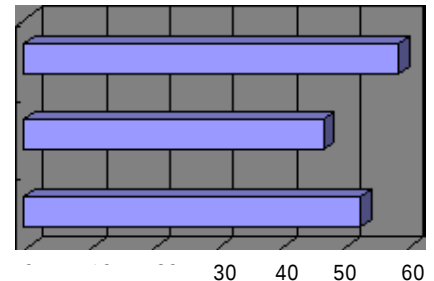
・プログラム

① プログラム全般



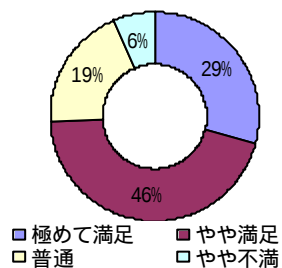
(2) どの発表が面白かったですか。興味をもたれましたか。

近代以前の日本と＜公共＞性
市民社会？西洋の論理と中国の現実
地球市民のみなさんへ

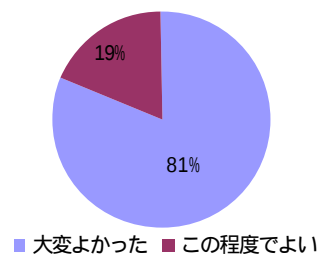


・内容

(1) 満足度



(2) 発表の平易さ

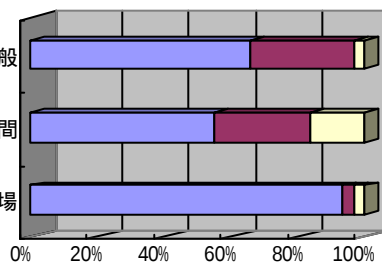


・運営

(1) 運営全般

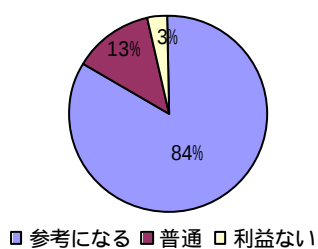
(2) 開催時間

(3) 会場

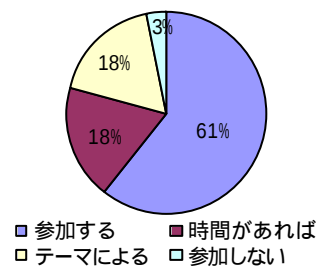


・研究会

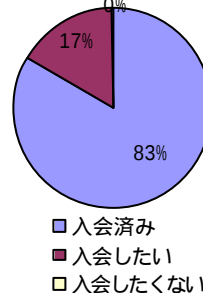
① 役立つか



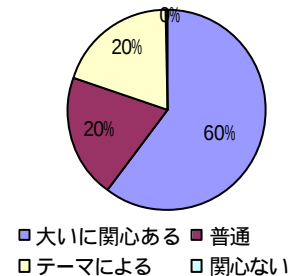
(3) 今後の参加



(4) 会員入会



(5) 関心度



SGRAレポート No .0004

SGRA第1回研究会

「地球市民の皆さんへ」

編集・発行 関口グローバル研究会(SGRA)

〒112-0014 東京都文京区関口 3-5-8 (財)渥美国際交流奨学財団内

Tel 03-3943-7612 Fax 03-3943-1512

SGRA ホームページ : <http://www.aisf.or.jp/sgra/>

電子メール office@aisf.or.jp

発行日 2001年5月10日

発行責任者 今西淳子

印刷 藤印刷

? 関口グローバル研究会 禁無断転載 本誌記事のお尋ねならびに引用の場合はご連絡ください。